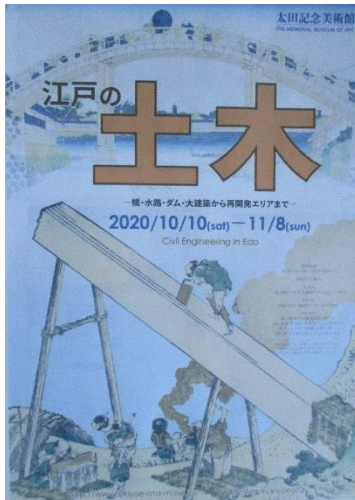


## 江戸の土木 — 橋・水路・ダム・大建築から再開発まで —

太田記念美術館 2020.10.10～11.08

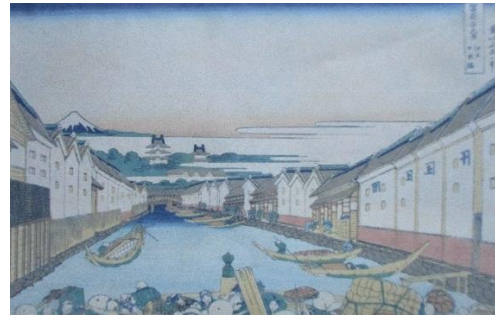


「土木」とは、道路や河川、橋梁、港湾などを造る建設工事のこと、一方、「橋やダム、河川、地形」などの土木に関連するジャンルが異常な人気を呼び、書籍や雑誌などのメディアで取り上げられる機会が増えている。

本展は、「歌川広重」や「葛飾北斎」など、浮世絵師たちが描いた作品を手がかりとして、江戸時代の「土木」をじっくりと読み解く展覧会である。

「徳川家康」が幕府を開いてから100年程で、人口100万を超える大都市となった江戸の街を大きく発展させたのが、高度な土木技術による市街地の造成や基礎構造の設備であった。具体的には、江戸城と外濠・内濠の建設、日比谷入江、築地、深川等の埋め立てや日本橋の架橋や上水の整備などであった。葛飾北斎《富嶽三十六景 遠江山中（とおうみさんちゅう）》（上図）

遠江国（静岡県西部）の山中で、角材に向かってノコをひくキコリが、巨大な材木が対角線に配され、支える柱の三角の間から富士山を望む構図で、工作機械のない時代の土木工事を担った職人や人足達の働く様子が描かれている。



歌川広重《東都名所 両国橋夕涼全図》

明暦（1657年）の大火で江戸市民が隅田川を渡れず、多数の死者が出たことから架橋された両国橋の夏の夕涼みの情景である。

葛飾北斎《富嶽三十六景 江戸日本橋》

画面手前に日本橋、奥に一石橋、その上に将軍家の居城である江戸城、左前方に「富士山」が、そして兩岸に建ち並ぶ蔵は透視遠近法で描かれている。

この日本橋は人工的に開削された水路で、橋の上は大きな荷物を満載した大八車、天秤棒、材木など様々な物や人の往来から一日の始まりのようである。